西山地区
コミュニティ協議会だより
【(西風) 令和５年度 12 月号】
発行：西山地区コミュニティ協議会
会長　中村史傳
令和５年 12 月８日発行
薩摩川内市下甑町瀬々野浦 1194
TEL　09969-5-0122
FAX　09969-5-0355

これからの行事（12 月の行事）

２日　旧西山小学校校庭草刈
５日　主事連絡会　10：00　支所
６日　健康体操
10 日　助八古道を歩こうかい
11 日　第 17 回事務局会議
12 日　コミュニティ餅つき
14 日　忘年会　18：00
17 日　地域内清掃
〃　サロン食事会
24 日　門松つくり
１月１日　新年拝賀式　コミ２階　10：00～

大帯姫神社秋季大祭終わる

恒例の大帯姫神社秋季大祭が11月12日無事終了しました。

郷土芸能参加者が３名でしたが、躍動感ある踊りの披露と、よくとおる鋭い掛け声が会場内に響き大変好評でした。

例年になく観客も多く、青瀬、手打、長浜からの観客も見受けられました。

開催日を日曜日に変更して行ってみましたが徹底せず、大変失礼いたしました。

踊り手は中村佳奈子さん、藤井快地さん、中村加依秀さん指導者は藤井清美さん。

４年振りに直会もコロナの制約も無く楽しくすごせました

11月の地域内清掃

11月の地域内清掃は、全班一斉に漂着物が多い海岸清掃にあたりました。墓柴の焼却等に当たる人以外は全員という事です。

総勢36名の方が参加されました。この中には法事で帰省中の方も参加されています。瀬々野浦で嬉しいことは帰省中の方々が、楽しい行事や、清掃活動等に参加されることです。いつまでも子どもの頃の親の生きざまを見ての事なのでしょうか。大変感謝しております。また、海岸清掃に参加されずに墓道の草刈り、等に従事された方々も大変ご苦労さまでした。

墓道も綺麗に刈り取られておりました。

避難道整備

11月26日、旧波止道の整備が行われました。参加者は上自治会10名、下自治会６名皆さまが参加され写真に納まっておられます。ご苦労様でした。この道は津波の避難道として使用されます。

第2回目の芋掘り

11月20日、月曜日、雨で二日順延された芋ほりが行われた。引き続き行われたコッパ切と合わせて合計22名の方々が集まりました。

観光協会の方も2名助人に来られました。写真は全ての作業を終えて乾燥しているところです。乾燥はこの日を含め4日かかりました。

助八古道整備7名参加

11月29日助八古道整備が行われました。風の強い日があったせいかタブの古木が倒れており切断が大変でした。

シリーズ9

故郷を深く浅く探る

メッチョウ出ーせ、ハーラメ出ーせ

むかしの大晦日の夕方近く、集落のあちこちで「メッチョウ、ハーラメ出ーせ。出さんというとカアーキ(垣)もカーベ(壁)もたまらんど。」と五～十歳くらいまでの男児の声がする。それとともに女児や中学生くらいまでの女子の歓声があがる。

「メッチョウ出し」は女性の尻を棒で叩いて多産(豊穣とも結びつく)を祈り厄落としのお払いの意味を持つ全国各地で行われる行事でもある。

「メッチョー」とは「娘・小娘・あま」をいい、山口県、福岡・宮崎などでも使われ、「メッチョ」山形県荘内・大分・熊本でも使われる方言らしい。

「ハーラメ」は「孕（はらみ）女」で妊婦である。

この尻たたきの行事は大みそかと一月十四日の小正月の二回行われていた。

大みそかは枝葉を落とした一本の篠竹（しのだけ）。小正月はカスアギ（アカメカシワ）の表皮をそぎ、真皮を削り残して逆巻にした「削り花」のついた棒をつくった。（つくってもらった）

手打の郷土資料館にはシンヌーラの「メッチョ―出し棒（この棒の名を何といったのか私はわからないので棒とする）」が展示される。

この削り花のついた棒は「幣（ぬさ）」の意味をもつので「木幣（きぬさ又はもくへい）といい、」アイヌでは「イナウ」といい、守護神として神棚に飾るという。

多産の祈り、厄落としからすると、小正月の「カスアギ削り花棒」が本来のもので、大晦日の「篠竹棒」は簡略化されたものと言わざるを得ない。

まったく同じ行事が一方は簡単な篠竹で、一方は手のこんだけずり花を用いて行われたのである。そして手のこんだ方が小正月という、子供の私には分からなかった節句におこなわれたことは一考の価値がありそうだ。

ともあれ当時のムラウチ（村内）は人口も多く賑やかであった。

ましてや子どもの頃の「トシノ晩」はトシドン様の恐怖はあってもスシを腹いっぱい食い、めったに口にいらない食材で作られたご馳走を想像して子供たちの「ソーロー」は上がりっぱなしであった。

他家にとついだ、おばたちは実家にスシを届けに行きかい、メッチョウ出しの子供の歓声が聞こえ、日没までには風呂に入るため、昼過ぎからは薪の匂いがする煙が村中にただよっていた。

私はトシノ晩には既に新しい年になっていたという考えを持っている。というのもトシノ晩には早く風呂に入り、新しい下着や着物を着せられ、トシノ晩にご馳走を食べていたからである。

だから「トシノ晩を」「大みそか」といういい方にはなじまない。

（中村史傳）